



「京都CF! 編集長の無責任、町案内」「nao's 京都牧遊記」など、京都CF!のスタッフが京都の街を綴ります。スタッフが街で見つけてきたオモイもん、誌面では紹介できなかった取材の裏話や取材の現場をなどを、日々の奮闘ぶりと共に垣間見ることのできるのがこのブログ。スタッフブログへのアクセスは、下記の京都CF! ホームページからどうぞ。

<http://www.kyotocf.com/>



今月の
オレが
甘かった



見るからにおどろおどろしい2Fのカフェ。築100年は床をも変形させ、平衡感覚もなくなる始末。ふらふら歩いていてと見えなくもゴツツンコ…みたいなこともありえるかも

**100年前からの
因縁の地!?
ある意味最強
(最恐?)の夏店。**



幼き頃、遊園地のお化け屋敷の入り口での記憶が甦る。ななめの屋根に「妖怪堂」なる看板…目をつぶりながら思い切って店内突入! 1階にはモノノケ、ではなくおもちゃや古着・妖怪グッズが並び、2階はカフェなんだけど、見えないお客様で満席ってこともありえない雰囲気。事実、「開封してない缶チューハイが軽くなって、飲みに来たはるらしいんぞ」と店主。初めてあちらの方の存在を実感。知らぬ間に飲み交わす仲になってるのも悪くない、かも…。

■左京区某所
京阪三条から徒歩3分

「この世もあの世も大歓迎!？」

ドイツにサッカー観戦に行った友人が、「記念にアウトバーンを走ってきた」という。アウトバーンといえば制限速度無制限のハイウェイ。豪快に300kmオーバーを体験してきたのだろうと思いきや、「ここは速度無制限なんだから」と何度言いかけても、「パトカーと遭遇する度に急減速して、結局アクセスを全開にできなかった」と彼は笑った。

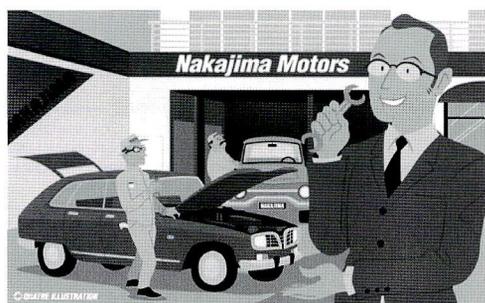
日本の交通社会は、数多くの規則に縛られている。最近では「携帯電話」「飲酒運転」「駐車違反」の罰則が強化された。予選リーグ敗退に終わった先のW杯。02年、選手に「規律」を重んじたトルシエはさしずめ「日本の高速道路」、06年、「自由」を重んじたジーコは「アウトバーン」か。規則に縛られることにより安心感を得て、逆に「自由だ」と言われると不安になってしまうのが日本人だとしたら、「10年を目指すオシムはどんな道路になるんだろう。」

「いけず」という言葉がある。「意地悪」という意味で、よく京都人を表して使われるが、それはお行儀だともいえる。仕事柄、色んな車に乗ってあちこち走るのだが、車線変更時、大きい車に乗ってこれば譲ってもらえなくて、軽自動車に乗っているクラクションを鳴らされたり幅寄せされる「いけず」に遭うことが多い。これも道路上に生まれたい車の大きさやフォルムによる、交通法規以外の「規律」である。旅先で出会う親切は嬉しいものだが、その土地の気質は、車に乗っている時に本当に解るんじゃないかと思うことがある。

京都を旅行される際は、観光地の散策とともに都大路、とりわけ堀川通あたりを軽自動車で行ってみると、意外と京都人気質に出会えるかもしれない。

Kyoto Car-Moratorium

~京都人のクルマ知らず~



中島 崇 (なかじま たかし)

68年生。自称「車道びの達人」。創業昭和38年、北区は紫野の自動車屋・(株)中島商会の二代目社長にして「安くていい車」を探すスペシャリスト。かつて自動車オークションの取引で2000万円をドブに捨て、大失敗の連続から学んだノウハウをまとめた無料小冊子「その車に手を出さな!」も好評。中島流「車道家元」を目指す京都人。



7th Lap

林映的 映画の味

イラスト文
ハヤシチサコ



「狼たちの午後」
DOG DAY AFTERNOON
75米
ジニー・ルメット
NYの1949年著者の反響が、大きな事件となり、悲劇のラストに

完全犯罪を宣言する
ネロ・ロルプの「リガール・パルム」
(クワイ・オーエン)。彼の目的
は何なのか? 金なのか?
人質はどうなる…?

INSIDE MAN

Directed by SPIKE LEE
監督: スピークリー
デンゼル・ワシントン
クライヴ・オウエン
ジロティ、フォスター
(2005米)

